

庄内協同ファームだより

No.112 2006年7月号



農事組合法人
庄内協同ファーム

発行/
〒999-7631 山形県鶴岡市八色木字西野338
tel.0235-78-2120 fax.0235-78-2140
http://www.shonaifarm.com



かわいいアイガモとともに

田植えをしてから10日後……
今年も鴨がやってきました。今年の鴨は生後2週間前後の手のひらにのるくらい大きさでかわいい鴨です。
田んぼ全体をネットで囲い、カラスよけの糸を張った田んぼに鴨を放します。元気良く泳ぎ回る鴨は見ていて飽きません。
鴨は好奇心旺盛で、はじめはネットの周りを泳ぎ、だんだん中へと入っていきます。虫などを見かけようものなら、ものすごいいきおいで追いかけて食べます。おもしろい入りそうなものとはとらずに食べないみたいで、そうして泳ぎ回っているうちに田んぼの泥がかき混ぜ

られ、日光が遮断されて草がはえてきません。小さい草などはすべてではありませんが、鴨につぶされてしまいます。

稲はそんな草たちより初めから大きいのでつぶされませんし、どういつ訳か稲をうみます。そうすると適度な刺激となり稲にとってもこち良いみたいです。他の稲よりも大きくなるのが少し早いような気がします。(私だけ?)
何年も有機栽培をしていると田んぼの中に微生物やら小さな虫たちが他の田んぼより目に見えて多くいる事に気がつきます。

田んぼのえさが少なくなってきた1週間後頃から餌として前年のくず米を与えます。私の場合日一回、朝に与えます。最初は逃げてばかりの鴨もだんだん慣れてきて人がそばにいても大丈夫になり、そうなると思いますかわいくなってきましたし、毎日大きくなってくるのがわかります。稲と共に成長していく感じですよ。

有機栽培をはじめるといろいろ問題点があります。大きなネックとなっている除草と虫が、合鴨農法は一挙に解決することができる農法だと思います。

しかし合鴨農法に問題点が無い訳ではありません。7月初中旬に田んぼから鴨を上げる訳ですが、この鴨は来年はつかえません。毎年小さな「ひな」を入れます。

(「食べています。冬になると「なべ」になって再登場したりします。)

有機栽培では合鴨農法だけにたよるのではなく、いろいろな方法があるので、組み合わせていきたいと思っています。私の場合鴨は毎年違う場所にして他の場所に除草機を使っています。

この様にして出来たお米を食べられる事を私は幸せに感じます。

今年もおいしい米を作りたいと思います。

今野裕之

1年生106名が 物調査に挑戦



文科省の「キャリア教育実践プロジェクト」で生き物調査に取り組み

藤島中学校1年生4クラス106名が文科省が進めるキャリア教育実践プロジェクトで農業体験と共に田んぼの生き物調査を2日間に渡って体験した。5月29日は第1人者岩淵成紀を講師に生き物調査の意義と調査の方法について学習し、翌30日は1クラスずつ4箇所に分れ、全国プロジェクトから派遣された講師や庄内協同ファームの組合員など地元スタッフの協力で生き物調査を実施した。

ただの「虫」の大切さを訴える岩淵氏

生き物調査に先だって5月29日、講師の岩淵氏は藤島中学校の1年生の皆さんを前に生き物調査の意義について講演し、益虫でもない、害虫でもないただの「虫」たちの大切さを次のように話された。田んぼに生息する生き物の中には作物に被害を与える害虫と言われる虫やこれを食べる益虫と言われる虫の数よりも圧倒的に多く生きているのだから、「虫」であること。その代表がイトミミズやユスリカやヤコなどであり、これらの虫たちは他の生き物や田んぼにやってくる野鳥たちの餌となり、また土づくりの役割を担っていること。つまり田

んぼやその周辺の環境の基礎をなしているのがただの「虫」たちであり、微生物たちであること、また田んぼの生き物を知ることには地域の環境を知ることであり、農業や食べ物を知ることであり、文化を知る

ことである。

これら地域の自然やすべての生き物たちを神と呼び、讃えるアジアモンスーン地域の人々の宗教観なども交えて解りやすく話された。



田んぼに中学校生徒の歓声

前日に岩淵氏の指導を受けた生徒たちは田んぼに到着してすぐ田んぼの畦を歩く感覚、泥土の感触に、カエルの数や土壌の採取に取り掛かる前に先ず歓



声をあげた。「気持ちいい」「気持ち悪い」感想は様々である。朝のうちは田んぼにはいるのをためらっていた生徒たちも調査が終わるころになり、田んぼの水が温まってくると夢中でカエルやどじょうを追っている。

田植えを終わった田んぼには農家の人の姿もめつたに見かけないこの季節、突然中学校生徒や指導者を含め50人近くの人が田んぼで歓声を上げている姿に道行く人も皆振り返った。

ふゆみず田んぼはとにかく生き物が多い

ふゆみず田んぼ(冬季湛水不耕起田)は秋口から田んぼに「ぼかし肥」等の生き物の餌になる肥料を散布し、その後は水を貯めておくので水生の生き物たちがどんどん増えてくる。

田んぼの生き物調査結果 (土中)とカエル 2006年5月30日

	イトミミズ (10a当り)	ユスリカ (10a当り)	ミジンコ (10a当り)	カエル (100m当り)
ふゆみず田んぼ (有機栽培)	1,195万匹	45万匹	10万匹	10匹
除草機 (有機栽培)	115万匹	10万匹	50万匹	10.6匹
減農薬栽培	20万匹	—	—	24.9匹
慣行栽培	80万匹	5万匹	—	1.1匹

藤島中学校 〈田んぼの生き〉



食育・農育は生き物調査から
庄内協同ファームでは昨年から田んぼの生き物調査に取り組んでいる。これはふゆみず田んぼ(冬季湛水不耕起栽培)やアイガモ農法などの有機農業を進めることで田んぼや周辺の環境がどう変わるのかまたは農法と生き物はどうかかわっているのかを具体的に知る必要があったからである。

また生き物調査を農家や消費者、学校や行政と一緒に進めることで環境にマッチし

商 品 紹 介



庄内特産だだちや豆

私たちのモットーである、安心、安全で美味しさを求めるという姿勢の代表作物が枝豆です。有機栽培に取り組んで6年ほどになります。

元々有機栽培では技術的にも難しい作物で、栽培当初は特に病害虫管理に苦労した生産者も多かったようです。(今でも苦労しています)栽培は、有機栽培(転換期間中含む)や栽培期間中化学農薬や化学肥料を使用しない方法です。夏の風味、一度食べたら又食べたくなるそんな枝豆を今年も皆様にお届け出来るよう日々農作業に汗を流しております。

だだちや豆ならではの独特の香りとコクをぜひ味わって下さい。(出荷時期は7月下旬〜9月上旬頃になります)



理解を得ることは大変重要であり、今後の地域の農業発展に不可欠と考え

た農法の研究と農業への理解を広げる事ができると考えている。特に小学生や高校生に農業に対する

庄内協同ファームやJA庄内たがわ、生産者グループ、地域の大学や教育機関、行政や普及機関で構成する庄内環境創造型農業推進会議が生き物調査を契機に有機農業推進のためのセンターとして消費者の皆さんの支援を得ながらさらに取り組みを広げる事ができればと考える。



協同ファームへ おいでよ!

ユーアイコープ 田植え体験交流会



へんりゅう 徒然草

五十嵐ひろ子



四月中旬、私は一人大根畑に茫然と立ちずくんでいました。

久しぶりに足を運んだ畑は、一面うす紫色の大根の花が風に揺れ、見た事もないほどの美しい光景です。昨年のも豪雪で収穫できず、雪の下で越冬した大根が、雪解け後に葉を伸ばし茎立ちし、花を咲かせたのです。二十アールの畑の約四割の大根が畑に取り残されました。漬物用のこの大根は、例年なら、薫製して、糠漬けにして、美味しい漬物になるはずだったのです。有機の肥料を施して、害虫も苦参エキスで防除し、お陰で今年は、いい出来の大根だ、と夫と喜んでいたのである……。花の咲いた大根を一本抜き、エプロンで砂を拭いて、カブツとかじってみると、水々しい大根の味がしました。大切な同志の命までも奪った憎い雪です。

無念であったであろう彼の気持ちを考えるとやりきれません。紫色の大根畑が、にじんでばかり見えました。

もう六月。連日二十度を越える暑さの中で、あの豪雪は薄らいではいるものの、記憶の中から消える事はありません。田んぼでは、アイガモが元気に泳ぎ回っていて通学路が近い

ため、保育園のバスの窓から園児たちが興味津々で見つめているし、小学校の生徒たちにもアイガモは人気者です。犬を連れてた村の老人も散歩コースをアイガモの田んぼに変えるほどです。

ひと雨ごとに枝豆も緑を増し、成長しています。美味しい枝豆をお届けできる様、私達生産者は努力を惜しまず日々働いています。

メロン畑に行く途中に、アカシアの花が満開です。白い花を



農業ニ知識

根瘤菌(こんりゅうきん)

枝豆の根に丸いコブのようなものがたくさんついてます。このおかげで、おいしくりっぱな枝豆が出来るのです。

このコブを根瘤といい中に根瘤菌が住んでいます。根瘤菌は根に寄生し枝豆から栄養をもらい、お礼に空気中の窒素を固定し、アミノ酸やタンパク質に変えて土を肥やして枝豆の生育を助けてくれる、良い菌です。

ですから、枝豆を栽培する時は窒素肥料を控えめにし、根瘤菌がたくさんつきやすい土壌環境を作ってやるのが大切です、それがおいしい枝豆を栽培するコツでもあります。

よく出来たマメ科植物と根瘤菌の共生関係“自然の奥深さ”に気づかされます。

咲かせ、甘い香りはメロン畑のミツバチを誘惑します。

自然の中で生かされていると実感する瞬間がいつばいあって、農業は楽しいものだと感じています。

今後続く若い世代にこの楽しさを伝え、共有し、感性を磨きながら、組合員の一員として。

“あたりまえのことを

ありのままに”

あとがき



青々と繁り始める稲、成長に合わせた土寄せがすすむ枝豆、春に定植した自家菜園のナスやキュウリが食卓にのぼり始め、うつつうしいこの梅雨を抜けると、日差しは日毎に強くなる。

この時期、勢いづく作物に負けない程、旺盛な生命力を見せるのが雑草たち。放っておけば、降っても、照つても食欲に成長し、あつという間に田畑を覆いつくす。7月はまさに草との戦いに明け暮れる月でもある。手持ちの機械や道具を駆使して、最後は人の手に頼る。梅雨明けの空はカラリと晴れて美しいが、炎天下のもと野外で働く農民にとって、体力を消耗する辛い作業でもある。

それでも除草を終え、きれいになった圃場は百姓としての一つの誇りを満たし、ほど良い達成感を与えてくれる。この月の草との戦いを通り抜けて、恵みへとたどりつく。

(東)